

【一】 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

日曜日の朝。今日もナイロビの空は、青いガラス玉みたいに晴れている。朝食を済ませ、僕はスケッチの準備を始めた。小さなボトルに水を入れ、鉛筆を研ぎ、紙を何枚かボードに挟み、絵の具、パレット、折りたたみ椅子と一緒にカバンに詰める。カバンをたすきがけにして、部屋を出た。今日はどんな人に出会えるか。別に行き先は決めていない。足の向くまま歩きます。

僕は人を描いている。人しか描かない。実は、絵は二の次だ。描いていいですかとたずねた時から始まる相手との交わりが楽しい。車が黒い煙を吐き出しながら、僕を追い抜いてゆく。道沿いに並ぶ店から、何かを焼く脂ぎった煙が流れてくる。ドブの水からは甘い腐臭が漂う。ゴミの山にはハエが群がる。僕が歩くのはそういう街の道端だ。

「ムチョラジ（絵描きさん）！」道の向こうから、誰かが叫んだ。見ると、若い男が絵を描く手振りをしながら笑っている。狭い街だから毎週スケッチして歩いていれば顔も知れ渡る。相手から声をかけられて描くこともこのごろは多くなった。

A 平日は大学。週末は街の道端。その間を往復しながら、僕はアフリカのナイロビという街で暮らしていた。週末ごとに街を歩き、道端の人たちを追う一方、僕のもうひとつのナイロビ、つまり、大学へ向かった暮らしも、日に日に充実してきた。

製図室では、学生たちが今学期最後の設計演習に取り組んでいた。課題になったのは文化センター。学生にはこの計画の目的や必要な部屋の種類や大きさなどを指示したプログラムが配られる。建物を構成するエレメント（要素）の一覧表のようなものだ。エレメントをどう構成するかは学生に任される。建築にするというのはどういうことだろう。僕の「常識」を押しつけたり、もつともらしく建築家の作品集を広げてみせたりするのではなく、学生たちにも通じる言葉で表現するならば、それはどういうことなんだろう。課題の度に自分の知っている「建築」をふりにかけて言葉を探してみる。しかし、何も見つからないまま最後の課題になった。

ある学生の図面の前で、僕は考え込んでいた。プログラムで要求された部屋が円形の広場のまわりに並んでいる。

「この広場は誰が何をするとこなの？」その学生はクラス一番の論客（議論が好きでうまい人）だが、言葉が出ない。

「まわりに住んでいる人たちがここで歌ったり踊ったりする……」と言うのがやっとだった。

ひとつひとつの部屋はきちんと考えられている。部屋を丸く並べようと、四角に並べようと文句はない。問題は、仮に丸く並べてみるとして、どうしてそう並べるのか答えられないことだ。この学生だけではない。形はいろいろあるが、どの形にも理由がなかった。ただ安易に——本当に、あつという間に——丸く並べたり、四角にしたりとまとめてしまう。つまり、エレメントのひとつひとつはよく考えられているのに、エレメント同士をどう結びつけるかについての考えが希薄（うす）で少ないのだ。僕の口からふとこんな言葉が出た。

「建築も人間の社会と同じじゃないか」僕は学生の図面の隅に、人間を描き始めた。初めはひとりだ。

「ひとりの人間には何かの能力がある」隣に、もうひとり描いた。

「この人も何かの力を持っている」この人にも、この人にも、と描き足していった。

「では、人間の社会の力とはどういうことなんだろう。人と人がどう結びついているかが、社会の力を決めると思わないか。人々の結びつき方次第で、社会はまったく違った可能性を持つ。建築も同じだ。建築の力は、それを構成するエレメントの結びつきの中にある。設計の本当の面白さは、この場所についての君自身のユニークな理解に基づいて、エレメント同士のユニークな結びつきを実現することにある。そうすることで、君の設計した建物にしかない力が生まれるのだから」この言葉は学生に届いた。

B 製図板の上の小さな社会。学生は、人と人がそこでどう結びつくべきかを考えながら、部屋と部屋とを結びつけてゆく。それはいい。では、製図板を離れた時、この学生たちは社会の中でどう結びつけられようとしているのか。僕はひとりひとりの学生に知識や技術を教えている。しかし、そうして力を得た学生たちが社会の中で誰とどう結びついてゆくのか、真剣に考えたことがない。社会での結びつきを考えずに、ひとりひとりに力を与えているだけだ。これでは結びつきのない部屋をただ並べているのと変わらない。学生に話したことが、そのまま自分に跳ね返ってくるような気がした。社会と学生の結びつきを考える時、真っ先に頭に浮かんでくるのは、道端の人たちのことだ。僕が週末の道端で出会うような人々と今ここにいる学生たちとは、社会の中でどう結ばれてゆくのだろうか。自分の言葉をきっかけに、僕は道端の人たちと学生たちとのつながりについて考え始める。しかし、答えは見えない。

ただ、ひとつだけはっきりしていることがある。ひとりひとりの学生に知識や技術を与えているだけでは、社会の中の大きな力にはならないだろうということだ。だとすれば僕が大学でできることは、本当に小さなことなのかもしれない……。しかし、僕には学生に伝えておきたいことがあった。「道端の人たち」のこと、道端の人たちの力だ。大学でめざされている力とは無縁の世界で、どれだけ多くの人々が力強く生きているのか。そこには大学では教えられない力がある。この国は長い間、西欧から食いのにされてきた。世界の動きに取り残されることは、新たな屈辱を生む。強くなければ、この国の（1）を保つことはできない。一日も早く同じ武器を身につけ、互角に戦えるようになること。この大学を生み、今も動かし続けているのは、強くなることへの揺るぎない意志であり、それを現実のものにするはずの技術や知識への飽くことのない憧れだ。

ある先生が日本の建設会社で作ったプロモーションビデオを上映したことがある。一緒に見物することにした。東南アジアでホテルを建てる話だ。工期は短い。人手も資材も乏しい。そこで、日本の工場で作ったコンクリートのパネルで建てる工法が採用される。数少ない機械と現場での簡単なジョイント（連結すること）だけで、アツという間にホテルはできあがってしまった。苛酷な条件を克

服する技術力の勝利という筋書きだ。学生にはすごく刺激になったようだ。これならケニアのどこにだって立派なホテルが建てられる。上映が終わると、質問が相次いだ。しかし、教室の後ろの席でビデオを眺めながら、僕は不安でならなかった。学生は先進的な技術を求める。先進国から来た僕たちがそれを教える。一見、幸福なやり取りのようだ。でも、これは怖い。

技術は風土や社会の束縛から人を自由にする。人が自由になるために技術は生み出されるのだ。しかし、自由と引き換えに切り捨てられたものがあることを人は忘れてしまう。こうした建築の陰で、その土地にしかない材料を使って、その土地の人々の手で建物を建てることの意味は見失われてゆく。

また、技術には必ず目的がある。目的が絞られるほど、技術の力は強大になる。

D

だけをめざした建

築は、少なくともその目的に関しては、鮮やかな成果をもたらしてくれるだろう。しかし、それ以外のことは何も保障しない。目的を絞れば犠牲になるものも多い。鮮やかな成果がそれを隠しているだけだ。先進的で、性能や効率だけをめざす技術にはそういう陰が潜む。しかし、教える側も教えられる側もそのことに目を向けようとしなない。ただ技術の輝かしさだけを見ている。この大学の隅々にまで行き渡る「力への意志」の中で、僕たちは力を与えることだけに、学生たちは力を与えられることだけに心を奪われているようだ。

もうひとつある。大学で与えられた力を手に学生たちはどこへ行くかとしているのか。製図室で感じた不安がこの時、はっきりと形になったような気がした。学生は道端の人たちのことなど眼中にないのかもしれない。問題だらけの社会を置き去りにして、どこか違うところへ飛んでゆきたいのではないだろうか。技術の力を鮮烈に描き出すビデオに夢中になっている学生を見ながらそう感じたのだ。この国には雲の上で生きているような人々がいる。権力の中枢に近い官僚や軍人、豊かな商人やビジネスマン。技術者だって役所のトップに納まってしまえば、手を汚し、額に汗して働くこともない。そういう人々がほんのひとにぎりしかいないことは学生だって承知のはずだ。それにもかかわらず、学生の目はいくらかでも上を見ようとする。よくいえば、今ここにないものへの憧れ。悪くいえば、今ここににあるものからの逃避だ。そして、学生のそういう「上昇（2）」の理由の一端は、どうやら僕たち自身にあるのではないかと思う。

僕たちは日本から来て、技術を教えている。しかし、日本の技術をそのまま持つてくるわけにはいかない。そこで、風土や社会の条件からできるだけ影響を受けない面が強調されるようになる。世界のどこへ持つていっても通用する即効力のある部分だけが伝えられるのだ。しかし、風土や社会から切り離された技術は

E

のようなものだ。技術としての力だけが残り、社会へ根ざす

力は失われている。社会に根づかず、消えてゆくのならまだいい。技術としての力が残っているだけに、余計に問題は複雑だ。風土や社会から自由になった力は恐ろしい。世界のどこにでも通用する力は、国と国との垣根を飛び越えはするが、その国の（3）な問題には答えようとしなない。答えようとしなないばかりか、先進的技術がそうであるように、社会や文化がもともと持っている力や価値を封じ込める力として働くこともあるのだ。

そういう技術が教室で学生へ教えられている。大学がめざしている「世界の動きに取り残されない」という目標にはふさわしいかもしれないが、この国の社会にあふれている問題に立ち向かうための力にはなりにくいだろう。だから、学生は自分の足元の社会に目を向けるのではなく、もつと上を、例えば、世界からこの国に押し寄せてくる技術（4）の波に乗って生きてゆくことのほうへ憧れてしまうのではないだろうか。僕たちが根無し草の技術を教えている限り、学生がこの国の問題だらけの社会から目を背け、雲の上の住人に憧れるのも無理からぬことのように思う。それは、学生を社会に根ざすことではなく、社会から遊離することへと誘う。学生にとって、僕たちの教える技術や知識は「雲の上に昇るはしご」のように映っているのかもしれない。今から思うところ僕の中であらゆる不安や迷いが一気に噴き出したようだ。そんな僕を救ってくれたのはひとりの学生の言葉だった。上映会が終わって教室のカーテンを開けていると声をかけられた。

「先生、ひとつ聞きたいことがある」クラス一番の論客が何を言いたすのか、ちょっと構えた。

「今のホテルですけど……。あれは建築家の仕事とは言えないですよ」

「なぜ、そう思う」

「早く、安く建てることだけをめざす建物だったら、建築家でなくても考えられる」

意外だった。学生は皆、あのビデオに酔いしれていると思っていたからだ。建築家ならば、と学生は続けた。

「施主の都合や金のことばかりでなくて、もつと広い（5）から考えるべきだ」こういう学生のちょっとした一言に勇気づけられ、僕は学生たちのことを考えながら道端を歩くようになる。

僕が悩みの果てに見いだしたのは、泥の家の街に生きる人々の力だった。それは、僕自身が人々の貧しさだけに目を向けていることとで見失っていた力だ。自分を助ける側に置くためにあえて見ようとしていなかった力だといってもよい。そして、大学で教えらる力の輝かしさの陰で学生が見失うものがあるとすれば、それも同じではないかと感じた。人々の力を見失えば、学生は根無し草になる。雲の上で生きることではあるかもしれない。しかし、それはこの国にとっても、学生自身にとっても、そして僕にとっても不幸なことだ。僕はそんなことをするために、ここへ来たわけではない。教えることが学生を根無し草にしてしまおうとしたら、僕には耐えきれないことだ。大学から眺めれば、道端は立ち遅れ、取り残された社会に見える。僕も長い間そういう見方から抜け出せないでいた。道端の人たちの明るさやたくましさを感じながらも、「援助のルール」に乗った別の自分が、こういう人々を（6）から救うにはどうしたらよいのだろうなどと考えている。そして、あの街でようやく僕は、貧しい人々を救うとか助けようとか考えている自分のおこがましさに気づいた。貧しいとか哀れだとか決めつける前にしなければいけないことがある。人々を豊かに目で見つめ、人々の力を感じるのだ。

貧しさの中で、人々は力強く貧しさを生き抜いている。人々の力こそが学生を導いてゆく。その力を見失わないでほしい。それが、ふたつの仕事の間で僕が見つけた、学生へ伝えようとしたことだ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

花、といえば、桜だろうか。

中学に入学してはじめての理科の授業に、桜の花を使った。

理科教室の机の上に、いくつもの、桜の花が置いてあるのだった。人体標本やら得体のしれないもののホルマリン漬けやら茶色の薬瓶やらふくろうの剥製やらが雑然とある理科教室の、古びた大きい六人掛けの机の真ん中に、十も二十も桜の花があった。ほの暗い理科教室で、桜が置いてあるところだけが――

A

。

二時間続きのその授業で、わたしたちは桜の花の観察を行った。花びらを一枚一枚そつとはずし、おしべとめしべを写生する。おしべの数を数える。めしべは縦切りにして断面図を描く。

「正確に、ていねいに、描きましょう」先生は、教室を回りながら言った。

なにか、

1

感じがした。小学校のときに行った鮎の解剖もこわかったが、桜の花の解剖も同じくらいこわかった。うすい花びらをはがすとき、桜が「きゅ」というような声をあげるように思えた。校庭にも、桜は多く散っている。土の上に落ちた花びらは、どんなふうにも踏んでも平気なのに、理科教室の机の上にある、花のかたちを持った桜は、触れてはならないもののように感じられた。「きゅ」「きゅ」という桜の声を聞きながら、八つ切りのケント紙に、2日の固い鉛筆で、こわごわ桜の花の部分を描きうつした。

した。

先生がよほど桜の花が好きだったのか、それとも季節ものだからなのか、さらに桜のことは続いた。家の近くの桜の木から二十個以上の桜の花を取ってきて、おしべの数を数えグラフに表すこと。そんな宿題が出たのだ。

日曜日の昼間、近所の養老院にある桜並木まで、わたしは一人歩いていった。咲き満ちて垂れている枝から、何個もの花をちぎり取った。理科教室の暗い机の上に置いてあったときほど、ちぎりが取れた桜はこわくはなかった。何個も取っているうちに、だんだん愉快になってきた。取った花を、山のように積み上げた。地面にべたりと座りこんで、春のうらうらとした日差しの中で、ゆつくりとおしべを数えた。おしべの数は、花によつてまちまちである。持ってきたノートの切れはしに「12」「15」などと記入してゆく。

ときどき風が起こつて、紙が飛ばされた。いちいち追いかけて走る。

何回めかに紙が飛んだときに、うしろから声をかけられた。

「その花、どうするんですかね」

振り向くと、小柄なおばあさんが立っていた。真っ白な髪をおだんごにまとめ、着物の首にスカーフを巻いている。

「あの、理科の宿題で」おそろおそろわたしは答えた。ここの花を取つてはいけませんよ。そう怒られるかと思ったのだ。

「持って帰るんですかい」おばあさんはしかし、怒る様子でもなく、

2

たずねた。

「いえ」うつむいたまま、わたしは答えた。風が、少し強くなっていた。前髪が吹かれ、額がむきだしになって、こころほそかった。

「それじゃ、その花、私にくださいな」おばあさんはさらに

2

言った。

うつむいたまま、わたしは頷いた。なんだかわからないが、こわかった。怒られているのではないのだが、こわかった。理科教室で感じたこわさと同じこわさだった。おばあさんは

3

様子なのに。おばあさんは腰に下げた布の袋の中から、

4

たたんだビニール袋を取り出した。小さな手で山に積み上げた桜の花をすくい、袋に入れる。桜の山は見る間に減り、はんたいに袋はふくらんでいった。透明だった袋が、うすもいろに色づいてゆく。ぜんぶの桜を袋にしまうと、おばあさんは腰をあげ、袋の口をしつかりとしばった。

「ありがとうござんした」おばあさんの髪のおだんごが、風に吹かれて少し揺れた。

「あの、桜、どうするんですか」わたしは聞いた。こわかったが、どうしても聞きたかった。

「持って帰つてね、水にうかべますよ」おばあさんは表情のないまま、答えた。

「水？」

「まだ生きてますからね、

B

は」

風がびゅうと吹いて、花びらを散らせた。おばあさんのおだんごにもわたしの髪にも、たくさん花びらが散りかかる。

おばあさんが、花でいっぱいになって表面のくもったビニール袋を

4

開いて、水の満たされた器に桜をあけることを想像すると、足もとが崩れてゆくような感じがした。と同時に、とてつもなく気持ちよかった。水にうかぶ、少し傷のついたいくつもの花を、

5 思い浮かべていた。

風が、いくつでも桜の花びらを散らせる。

桜は今年も、薄く濃く咲きめぐつてくることだろう。

第一回 国語科問題

11010

〔一〕

線Aについて、つぎの①②をそれぞれ書きなさい。

①「僕」が街の道端に行くのは何をするためですか。

②「僕」は街の道端に行くことにどんな魅力を感じていますか。

〔二〕

線Bとありますが、なぜ「僕」は「小さな」社会と呼んだのですか。理由を自分のことばで書きなさい。

〔三〕

1～6に入る最もふさわしいことばをつぎの語群からそれぞれ選んで、漢字に直して書きなさい。

かくしん ぎゃつきよう そんげん しゃ しこう こゆう

〔四〕

線Cとありますが、それはどのようなものですか。文中から最もふさわしい部分を二十字以内で探し、はじめと終わりの三字を書きなさい。句読点もふくみます。

〔五〕

D、Eにはどんなことばが入りますか。文中から最もふさわしいことばを、Dは十字以内、Eは五字以内で探して書きなさい。句読点もふくみます。

〔六〕

線Fとありますが、この「不安や迷い」を解決する道を「僕」はどこに見いだしていますか。文章全体から考えて、自分のことばで書きなさい。

〔二〕

（一） Aにはどんなことばが入りますか。ふさわしいことばを考えて書きなさい。

（二）

ことばのきまりの問題です。①②をそれぞれ答えなさい。

① 線⑦～⑩の中で、文の中の役割がちがうものをひとつ見つけて、記号で書きなさい。

② 線⑪～⑬の中で、成り立ちがちがうことばをひとつ見つけて、記号で書きなさい。

〔三〕

1～5にはどんなことばが入りますか。つぎのA～オの中からそれぞれ最もふさわしいものを選び、記号で書きなさい。同じ番号のところには同じことばが入ります。

A 静かに イ うつとりと ウ 優しく エ 無残な オ ていねいに

〔四〕

Bにはどんなことばが入りますか。ふさわしいことばを文中から十字以内で探して書きなさい。

〔五〕

線⑭とありますが、「わたし」は桜のどんな思いを感じていますか。自分のことばで書きなさい。

〔六〕

線⑮とありますが、「わたし」はなぜそのように感じたのですか。つぎのA～カから理由としてふさわしいものを二つ選び、記号で書きなさい。

A ちぎりと取られたばかりの桜はあまりに美しく、勉強ということを忘れて見とれてしまったから。

イ 養老院の桜並木で桜に親しむお年寄りを見ると、思わず心が和んでしまったから。

ウ 咲いている桜の枝から楽しみながら花をつんだので、観察という感覚が薄れたから。

エ 桜の花を取って観察するうちに、そのつくりの見事さに気づいて感動した後だったから。

オ 桜をつむことに夢中になっているうちに愉快になってきて、理科の実験が楽しみなってきたから。

カ 理科室という特別な空間ではなく、春という季節の中で安心して桜を見られたから。

〔七〕

線⑯とありますが、なぜ「わたし」はこのような思ったのですか。その理由を自分のことばで書きなさい。

〔八〕

線⑰とありますが、なぜ「わたし」はこのような感じているのですか。その理由を自分のことばで書きなさい。

(八)